

大河内の日吉のさる

豊前市の求菩提谷をのぼって行くと丹下左善で有名な大河内伝次郎の生家がある。この大河内地区の田んぼの中にこんもりとした森が見えてくる。ここに日吉神社がある。

むかしむかしこの日吉神社には、神様のお使いをするさるが住んでおったそう。ある年の春のこ。あまりのお天気よさにさそわれて、このさるは、道に出て日なたぼっこをしておった。するとそこへ、鉄ぼうを持ったわかいりょうしが通りかかった。

「おつ、さるだ。いいものを見つけたぞ。」
とばかりに、りょうしは大よろこびで、さるを目がけて鉄ぼうをかまえた。

しかし、よく見ると、さるは何やら悲しげな目をしている。しかも、何か言いたそうなくさで自分のはらを指し、なでているではないか。りょうしは、そのしぐさがあまりにあわれに見えて、思わずかまえた鉄ぼうを下ろした。だが、さるが何度もはらをなでるのを見ているうちに、

「りょうしよ、うちのならばいいことをつけて。」



と言われているように思えてきた。そこでりょうしは、いったん下ろした鉄ぼうをあらためてかまえ、ねらいをさだめて引き金を引いた。

「ズドン。」

たまは、さるのほらをみごとにつきぬけた。

「しめた、今日のえものは大きいぞ。」

と、こおどりしながら近づいたりりょうしじゃったが、さるを見て、「あつ。」と息をのんだ。何としたことか、さるはおなかに子をやどしていたそう。ほらをなでるしくさは、「子がおるので、うたんでくれ。」というねがいだったのじゃ。りょうしは、「かわいそうなことをしてしもうた。」

と、くやんだが、もうどうすることもできんじやった。

それからりょうしには、悪いことばかりがつづいた。りょうしはだんだん人がかわったようになり、酒を飲んでけんかばかりして、りょうしにも行かず、田畑も人手にわたってしもうたということじゃ。こんな悲しいできごとがあったからか、今でも村の人々は、大雪のふりしきる冬、えさをもとめて、人里近くまで下りたさるを見かけると、いもや豆をあたえるという。

そして、

「あれは日吉神社のさるで、神様のお使いをしている。決していた



ずらをしてはならんぞ。」

と、子どもたちに話^{はな}して聞^きかせるということだ。

さるが神の使いであったことを知^しってか知らずか、わかいらょうしにとってあまりにも不^ふ幸^{こう}なできごとじゃったんじゃなあ。

(末吉育子)



大河内の日吉神社